2.再出発

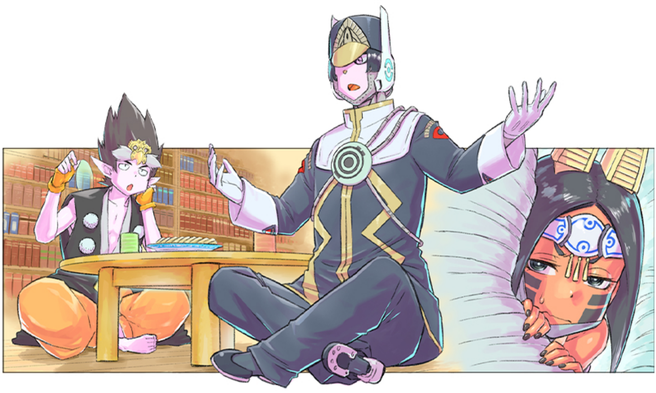
龍の卵から生まれた少女、
アズリアの謎をめぐるソウラたちの
旅は続く。

三魔博士によって作られた新たなる魔物、献義体ギラチス、シジマ、ネフェルニシアはたびたびソウラ達冒険者と戦うことになった。本来様々な戦闘の経験を積むために、色んな相手と戦わせるのが魔博士たちの当初の方針だったが、絡み合う因縁が幾度も彼らをめぐり合わせるのだった。
かつてソウラ達を苦しめた魔公子イシュマリクや、今や世界を救った勇者の盟友と称えられるまでになったユルール達ですらてこずらせる強敵「献義体」。血で血を洗うような戦いが続く・・・かと思いきや、戦士としてはあまりに感情に素直に行動する彼らとの戦いは、激しくもどこか緊張感に欠く奇妙な付き合いになっていくのだった。

エストリスはギラチスの放蕩ぶりに手を焼いていた。
我儘で自分勝手、おまけにひねくれ者でいたずら好きでもあった。言いつけにわざと逆らってこちらをからかってくることもあれば、怒って突き放すと構え構えと絡んで来る。

自重を自由に増減できるということは、理論上無限に近いスピードと運動エネルギーを得られるということである。この能力を備えたギラチスは、最強の戦士となりうるポテンシャルを持ち、実際卓越した戦闘センスでその能力を使いこなしつつあったが、傲慢で調子に乗りやすく、隙をつかれて罠にかかったり、口車で言いくるめられたり、いいところまで追い詰めながら取り逃すことが続いていた。
そんなギラチスを咎めたり、なだめすかしたりして少しずつ経験を積ませていくのは、今までの仕事とは違う厄介さがあり、エストリスは頭を抱えつつ、今日も不肖の悪餓鬼の尻を蹴立てて悪事に邁進するのだった。

一方シジマは、ギラチスたちとは対照的に、スマートに自らの興味関心を満足させつつ、充実した日々を送っていた。
各地の達人たちに腕試しを挑み、書庫を訪ねては学び、知識人たちと哲学論議に花を咲かせたりもする。あらゆることが興味深く、森羅万象の全てを知りたい、人の五感の浴しうる全てのことを感じたいという思いは膨れるばかりであった。



そんなシジマを見守るプラクゥは、胸に沸く奇妙な感慨に少々戸惑っていた。
自らの探求心を満足させるために、あらゆる倫理観を排除する必要があって、彼は自らの心をまず改造した。彼はもともと規範やモラルを尊ぶ性格だったのである。
探求心と倫理観の間で葛藤があったのは間違いない。しかし自らの脳の改造にまで手を染めるきっかけになった何かがあったはずなのだが・・・。
自身の心を作り変えて以来、迷いなく研究に没頭しているうちに、プラクゥはそれが思い出せなくなっていた。作り変えた心にとってそれはもはや大切なことではなくなっていて、忘れていても今まで気にならなかったのである。
しかし今、シジマがのびのびと自らの好奇心を満たしているさまには、既視感を感じるのであった。あれはかつての自分自身か、あるいは・・・？

日々貪欲に学び、経験していくシジマはしかし、学べば学ぶほどに、自身をこのように導いた女剣士、かげろうに対する謎が深まっていくのだった。
いったいどのような環境が彼女の感性を育んだのか、今の彼女の目にはこの世界がどのように映っているのか。考えれば考えるほどミステリアスで、それを解析し、理解しなければならないという焦燥に駆られるのだった。それは興味や好奇心という範疇で説明できる心の動きなのか、もしくはそれ以上の・・・

ネフェルニシアといえば、姉ディオニシアと、ユルールの仲が気になっていた。
何度か手合わせしてみて、なるほど見てくれ通り、ただのぼーっとしたお人好しではないということは分かった。一本芯の通った、ひとかどの人物であることは認めよう。だがあのゆるゆる具合はどうだ。姉様は尽くすタイプだ。あんなお世話のし甲斐がありそうな奴なんていかにも・・・じゃなくて！！
あの男に自分たちの一族を救ってもらっては、彼女としては無念なのである。自分と姉を使い捨てにするようなろくでもない連中なのだ。だがあのお人好しはいかにもやってしまいそうなのであった。
何とかして止めなくてはならない。自分たちには時間がないのだ。彼女を蘇らせたあの変なおじさんも霊体のメンテナンス以外のことは色々と残念だし、さてどうしたものか・・・。